

■■ 農民と狸 ■■

一

日本農民の心理なども、この時代的大変革の影響を受けて変わるであろう。そうして土への執着というようなことも、等しく持ち合わせたとしても、かなりちがった形に表れると見なければならない。

その農民の心理に関することだが、日本の農民諸君は、ほんとうに土に徹していたかどうかは疑われる。少なくとも土の虫とまでいわれる支那の農民とは、かなり感情的にも距離がある。そうしてあまりに穿ち過ぎた説明かも知れぬが、その昔の狩猟時代の夢がまだ醒め切らぬところがある。それを思わず一つのよい例は、大切な秋の麦播きでも、山で鹿を追い出したとか猪が出たなどと聞くとそっちへ心を奪われる。せわしい田植えの最中でも、池のかいぼりで鯰が出たとか大きな鯉がいたなどと聞くと、そっちへ走りたがる傾向がある。これはあらゆる生活を通じて言えることで、何事が起ころうとも、農事に専念して他を顧みぬと言った態度に欠けていると、こんなことをある雑誌に書いたことがあるが、そこへゆくと女性の方は遙かに真面目で徹底したところがある。これは女性が性格的に、狩猟などに興味を持たなかったのとは別で、ここにも古代生活の名残が窺われる心地がする。ひところは三千年来の農民魂などという語がしきりに叫ばれたが、仮にそんなものを持ち合わせていたとしても、前いう理由で男たちにはそのまま当らぬ場合が多い。だから年間を通じての農家の在り方を見てもどっちが当の責任者かに迷わせられる場合が多い。その意味で日本農業から女性の管理に属する部分を取り去ったら果たして何が残るかすこぶる心許ない。それだけに女性にとかく実権があるのだ。早い話が男たちが如何に同胞愛に燃えても、女性の諒解なしには一粒の米も供出し得ない実情にある。

二

ひどく前置きが長くなったが、この話は今いう男性の無責任いわば呑気というか子供っぽいというかそれを実証する一つの例で、そうして相手は山の狸である。話の主は今も健在で村の精農者の一人だが、その人の若い頃、ちょうど小正月の餅つきの朝だったそうである。朝起きるなり女房に向かって、帰ってから餅を搗くからそれまでに準備をして置けと言い置いて何処とも告げずに家を出た。女房は言われるままに仕度に取りかかった。そうして蒸籠の餅米からそろそろ湯気が上がる頃になっても主人は帰って来ない。朝飯前ではあり遠方へ往ったわけではなかろうと思って、今か今かと湯加減を気にして待ったが、還って来ない。それと見た姑も見かねて、せっかくの祝い餅をしくじってはと、女たちで

搗き終わって神まつりもすませてしまった。それから昼も過ぎ夕飯の時刻も終わって、夜も大分更けた頃にぼんやり帰って来た。そしてどこへとも言わず黙って夕飯をすまずとそのまま寝床へ入ってしまった。もちろん気がふれたわけでも道で迷子になったのでもない。それならどうしたのかと言うと、実は次のようなわけで、主人とすれば女たちにいささか気まずいものがあったのである。

三

前日の暮れ方に近くの友だちが来て、たしかにいる狸の穴を見つけたから、明日は堀にかかるが何なら一口乗らぬかと誘われた。それを聞いて何かな気がかりで夜を明かしたが、朝になると引きつけられるように家を出たのだ。実は姑の手前もあり狸の穴を見に往くとも言われぬまま、ちょっとの間と言い置いたので事実ちょっと覗いたら帰る心算であった。

その狸の穴のある場所と言うのはちょっとした山の窪で崖に臨んだ木立の中であった。往くともう仲間が二人いて盛んに土を掻き出している。傍らには狸を抑えるための叉木も三本ばかり用意されてあった。そうして三人いれば朝つくりにはもったいないほどの仕事だなどと語っていた。そこでどれ俺に一つ見せろというようなことでいつか仲間に加わっていた。

ところでその狸の穴というのは、話のように途中で岩にぶつかって、どうにも始末にゆかぬ。爆薬でもあれば別だが、そんな調法なものはない上にひどい場悪で、しかも岩盤はひどく堅いときている。ああでもないこうでもない、代わる代わる石を砕くうち、気がつくとも太陽がもう高く上っている。ほんの朝仕事と思ったのがそれと思うと急に腹が空いてきてどうにもならない。「どうだ腹が空いたじゃねいかあ」と言うわけで、忌々しいが穴にはマセを結って手近の仲間の家に往って飯を作らした。その頃大方家では女房が餅つきを終わって後片づけをしていたのだ。さて飯の用意が出来て食ってふたたびもとの場所へ還った時は、もう木立の中は心もち薄暗くなっていた。今度は腹ごしらえが出来た勢いで、穴の口に松葉を積んで燻しをした。さらに石を振り上げて岩盤をゴツンと突いても見たが、穴の底はコソリの音もしない。確かにいるはずだと、鼻を穴へ押しついたり、耳を当てて息を窺ったりもした。狸が床に敷いた落葉を掻き出して奥を又木で掻き廻したりするが何のこともない。あるいは穴はなお深いのかも知れない。そうこうする間に、ふと頭を上げて見ると繁り合った梢にまんまるく月が懸っている。一四日の月だ。すっかり時刻は夜になって、お互いが真っ暗い中で働いていたのだ。それと気がつくともさすがにばかばかしくなった。そうして二度目の空腹が強く襲って来た。「こりゃ今日の仕事にやゆかんぞ」と言うわけで、忌々しいが諦めることに評議は決した。あらためて穴の口に嚴重にマ

セを結ってから、めいめい家路についたのである。こういう次第だから女たちに気まずく思ったのも無理ではない。その狸は翌日の昼頃に捕った。たった一匹で、例の狸汁にして喰いはしたが、これでは一家の家長として責任を持つ態度とは言われぬ。そうしてかならずしも小正月の餅つき朝に限らぬのである。

月の雨狸めがうつ鼓かな

玉鉾